

水害を繰り返す土地に住む

「テレビなんかを急いで2階に動かしたんだけど、水が引いてきたもんで1階に降ろしたら、その後また水が上がってきたもんで、全部ダメんなっちゃった。」

ご高齢の男性は、そう言って笑った。昨年11月に静岡市内の某所で災害ボランティアに参加したときのことだ。水に浸かってダメになった家電や家具は「ごみ」になってしまった。

この地域では、昨年9月の台風15号の影響で多くの住宅が床上浸水を被った。半日もしないで水はすぐに引いたそうだが、水位は高いときで大人の胸の高さまであったそうだ。それを聞いていた僕は、もちろん笑えなかった。

実は数年前の豪雨災害のときも、この地域は浸水したらしい。地形的な理由で、川から溢れた水がどうしても滞留しやすい場所のようである。

できることなら、住まう場所を探すときから水害に見舞われない土地を選ぶのが理想である。しかし、様々な理由で、水害を繰り返す土地に住む人もいる。ましてや地球温暖化の影響で降水量が増加すると予想される今後は、これまで水害が少なかった地域も危険になるかもしれない。

ある防災関係者のオンライン会議で「水害対応文化」という言葉を聞いた。正しく恐れて備えつつも、慌てずしなやかに対応し、何かあっても笑い飛ばせるくらいの心の余裕が必要なのかもしれない。

「ごみの減量と分別から

取り組む防災

松尾 和光

(まっお かずみつ)

静岡市在住

分ければ早い、混ぜれば遅い

水害に限らず、大規模な自然災害が発生すると、ふだんとは比べ物にならないほど大量のごみが一気に排出される。いわゆる「災害ごみ」とか「災害廃棄物」と呼ばれるものだ。(被災した方々にとっては「ごみ」とか「廃棄物」ではなく、大切な思い出の品々だったりするのだけど。)

この災害ごみは、被災地の復旧・復興を遅らせる大きな要因になってしまう。そんなごみ問題から防災を考えると、というユニークな講座に最近参

加した。

災害ごみの収集は、普通の生活ごみの場合とは異なり、まず公園などが「臨時ごみ集積所」に指定されることがあり、ここに集められた後、さらに「仮置場」へと運ばれる。静岡市の担当職員によると、臨時ごみ集積所に出される時点できちんと分別されていないと仮置場で分別しなければならず、行政による収集もスムーズに行われないとのこと。

災害廃棄物を考える関係者の間では、生活の回復はごみを“分ければ早いし、混ぜれば遅い”という合言葉があるらしい。講師の濱田晴子さん(一般社団法人住環境防災サポートセンター)曰く、「私たちができることは、日頃から物を減らした暮らし方と、分別を習慣づけることからかなと思います」。

なるほど。まずは自宅の掃除とごみの分別を身近な防災として取り組もう!そう決意して帰宅した僕は、散らかった自分の部屋を見て笑った。



仮置場に集められた大量の災害廃棄物(2022年11月、静岡市清水区にて撮影)